
a Wandering Life

ゆず胡椒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a W a n d e r i n g L i f e

【Nコード】

N 2 2 9 7 B A

【作者名】

ゆず胡椒

【あらすじ】

異世界に飛ばされた双子の姉弟には、剣と魔法と冒険の世界が待っていた—— 自分達の世界との常識の差に悩んだり、強大な魔力を与えられたのに巧く扱えなかったりと、中途半端な強さで頑張る二人が、助け合いながら世界を旅する異世界冒険物語。 退屈を何よりも嫌う双子は非日常を思う存分謳歌するつもりだったが、そう全てが上手くいくわけもなく……

察しが良すぎる、シニールで常識外れな自称・文学少女の姉と、常識人であるが故に苦勞を背負ってしまう心配症の弟は、はたして、

無事に元の世界に戻るのか？

ちよっぴりチート風味な、王道？ファンタジー。

一応グロ注意なので（多少、血や痛い表現があります）、お気を付け下さい。

1 蝉時雨と双子

「つまんなぁーい！」

「……毎日、退屈だよな」

「夏」という季節を溶かし込んだような色の空。

じりじりと照りつける太陽と騒ぐ蝉時雨を全身に受け止めて歩く男女が一組。

つまらない、とうんざりした顔で言い放った少女は、その綺麗な顔を暑さにゆがませる。

すらりとしていて、女性にしては高い身長のせいか、少女は見る者に中性的な印象を持たせていた。

本人の性格とは違って、控えめな胸も彼女を中性的に見せている。風に遊ばれている黒髪が長くなかったら、五人のうち三人は彼女の性別を疑っただろう。

対して、その少女に同意するような言葉を返した少年は、見た目からして男らしい。

少年というよりは青年に近いのだろうが、暑さに顔をしかめているところに少年の面影を感じさせる。

きりりとした、涼しげであると同時に、怖そうな印象を与える切れ長の目だが、十分に整った顔立ちだった。

二人で歩いているところを見ると恋人どうしに見えないこともないが、二人の関係はそんなに甘くもなければ脆くもない。

生まれた時から今までずっと一緒の生活を送ってきたもう一人の自分ともいえる存在——つまり、双子である。

この二人は、双子であることの珍しさに加え、「才色兼備」「文武両道」を地でいくような存在だった為に、周りからは常にちやほやされていた。

なおかつ、大企業の社長令嬢、社長令息とくれば、羨みを通り越して畏敬の眼差しで見つめられる。「住む世界が違う人間なんだ」と。

一般人からしてみれば羨ましい境遇と才能の持ち主である二人だが、二人とも現在の生活に不満を持っていた。

大企業の社長令嬢・令息というだけでも一線引かれる立場である上、人より頭二つ三つは抜けている才能の持ち主だったから、常に周りになる人間は二人のことを「凄い」「天才」「素晴らしい」と云う目で見えてきて——それ以上、近寄ってきてくれはしない。

高校の先生までもが二人に遠慮している。

人より格段上の才を持っているからと妬まれることもあるし、取り入ろうとしてくる奴もいる。

普通の友人になってくれそうな者たちは皆揃って遠慮する為、二人は高校の中でも奇妙な浮き方をしていた。

少女に言わせれば「猫の中にフレンドリーな虎がいた感じ」である。

生まれてからずっと、そんな状況が二人を取り巻いていた為に、二人はたまに「誰も自分達の事を知らない世界に行きたいね」と話すことがあった。

現実逃避なのは理解している。

しかし、つまらないのだ。

バカ話できる友人もいなければ、殴り合いの喧嘩を出来る親友もない。

仕方がないからと暇潰しに武道や勉学に打ち込むものの、どこか物足りない。

世界が広がらないのだ。

見える世界はいつも二人の視界の中でしか語られない出来事の一欠片でしかなく、すぐに色あせてしまう。

「あー、学校に来たのに、話す友達もないし」

「先生は腫れ物でも触る対応だし」

「つまらない」

流石双子、というべきタイミングで言葉を発した二人は、全く同じ動作でため息をついた。

二人の心とは反対に、天気は晴れやかで暑苦しい。

これ以上憂鬱な気分になせないと少女が街路樹に止まった蝉を睨んだ時。

ぴたりと、蝉時雨がやんだ。

何の音も聞こえなくなる。

しばらくそれに気づかず歩いていた二人だが、騒音がなくなった事に異和を感じて足を止めた。

空は青い。

——まるで、時間が止まったようだった。

「なーんか、変な感じ」

「こつも急に鳴き止むのも薄気味悪いよな——何かこつ、これから起こりそうぞさ」

「起こつてもまた蝉の大合唱位じゃない？まあ、異世界への扉がうんたらかんたらうだったら面白いけど」

最近流行りの幻想小説の設定を持ってきて、少女が茶化する。

そうだな、と肩をすくめて、少年が歩きだした。

「そう。そういうのって面白いと思うよね」

歩きだした二人の足は、再び止まる。

くるりと振り向いた二人の目の前には、真つ黒な服に黒いシルクハットを被った男が一人。

暑そうな格好、と姉が呟くのを耳にした少年は、肩にかけていた竹刀ケースに手をのばす。

男はどう鼻屑目に見ても怪しさ満点だ。

シルクハットの顴に目元が隠されていたが、口元が弧を描いているところを見ると、この男、笑っている。

「つまらなさそうな顔してるネー」

二人は口を開かない。

少女は竹刀ケースに手をかけた弟をちらりと視界に入れ、ポケットに手をのばす。

目の前で笑っている男は、どう見てもおかしかった。

夏なのに黒ずくめなのは良い。服装は人の好みだ。

丈の長いコートを着ているのに汗一つかいていないのも、今は良い。

——問題なのは、男が地に足をつけていないこと。

要するに、「宙に浮いていたこと」だ。

「そんなキミ達にボクからプレゼント。欲しいよネー？」

双子は言葉を返さない。

「あれ、無反応？ま、良いや」

男は気の抜けた笑みを浮かべ、シルクハットを少し持ち上げて顔をよく見えるようにした。

紫色の奇妙なアイメイクが露わになる。

道化師のような笑みに、道化師のようなメイク。

さらに警戒した双子を知ってか知らずか、男はこう続けた。

「ボクの暇潰しにつきあってくれたら、異世界に招待するよー？」

蝉時雨はまだ、戻らない。

凍り付いたような時間の中、太陽の熱と男の異質さだけがいやにくつきりとしている。

最初に口を開いたのは少女の方だった。

「悠斗、いこ」

制服のワイシャツを引つ張って、少女はこの場から離れることを表明した。

少年の方もそれには賛成らしく、少女の提案通りに男に背を向けようとする。

しかし。

「高月凜音、高月悠斗。キミ達は人並み外れた才能を持ちながら、それを持て余し、その才能が原因で退屈な生活を送ってきた。ボクはキミ達に世界を見せたいと思う。楽しい楽しい、世界をネ」

急に告げられた名前に、少女も少年も動けなくなる。

本能が警戒音を発していた。太陽の熱なんて、今やもう感じられない。

男の笑顔が驚くべき早さで二人の心臓を締め付ける。

「ま、つまりは、“拒否されても連れていく”、ってことなんだけどー」

ぱちん、と男の指が鳴る。その音に弾かれたように走り出した、二人の足元のアスファルトが、砂糖菓子のように崩れていく。

崩れたところからは、男の服のような黒が覗いていた。

マッドハッター

「イかれた帽子屋はアリスで十分！」

「そんなこと言ってる場合か！逃げるぞ！」

走る二人を笑顔で見つめ、男は広がる黒の中心に浮いている。

「でもね、悠斗、多分これ、逃げらんないわよ」
「だな」

足元に迫る黒に一瞬身を竦めた二人は意を決したように後ろを振り向くと、辛うじて残っていた地面を強く踏みつけた。

「落とされるより落ちた方がマシ——ってか、凜音」

「よくお分かりで」

「ほんと、生まれてくる性別間違えたんじゃない？ 漢らしくてびっくりだよ」

「余計なお世話！」

二人揃って飛び上がると、綺麗な弧を描いて身を投げる。足から順に引き込まれていく感覚に二人は目を少し見開いた。

そこには何の感覚もない。

沈み込む体を引き寄せあって、二人はぎゅっと目を瞑った。

「…あの子以来だね、こんなに面白そうな人間は」

黒に二人が完全に沈んだところで、男は再び指を鳴らす。

黒は瞬時にかき消えて、蝉が再び騒ぎ始めた。

日当たりの良い大通りには元通り時間が流れ始め、男の姿もそこにはない。

アスファルトは元通り熱にさらされて揺らめいているし、空は青いままだった。

先程までと違うのは、人が二人消えたことだけ。

*

真っ黒な空間の中でも、妙に二人は冷静だった。
ただの兄弟や一人っ子には分からない感覚かもしれないが、二人
でいるだけで随分と落ち着くものだ。

怖いことも不安なことも二人でなら乗り越えられる、そんな気分
になれる。

だから、

「暇潰しで異世界に招待、なんて、止めて欲しいわよねえ」

「ぶつとんだ格好してるだけあったよな」

「大体真夏に黒ずくめって、神経疑うわあ。暑いじゃないの」

「暑さに頭沸いてる奴かと思ったけど、沸いてたのは元からだろう
な」

こんな状況でも軽口をぽんぽん叩けた。

普通ならば戸惑うか喜ぶか、或いは絶望するか。
少なくとも、一般的な反応とは大きくかけ離れている。

——もし双子がそれを聞いたなら、「こんな体験をさせてお
いて『一般的』も何もない」と言っただろう。

しかし何もない暗闇だなど少年が呆れたように呟けば、少女の方
も同意する。

「気が利かないわよねえ。招待、っていうより拉致に近いし」

もう少し面白い空間に放り出されたかったんだけど、と言った少
女に反応するように、周りの空間が変わり始めた。

『注文が多いネー』

男の声が響いて、暗闇の空間は、“ただの暗闇”からどこかの家のような空間に変わり、薄暗い部屋の様相になる。

少し汚い部屋の中置かれている、モヒカン頭にピエロ服の引きつった笑みを浮かべたマネキンが不気味な滑稽さを醸し出していた。

『ボクのことろクソだし』

声だけ響いていたが、男はそのマネキンの隣にひょっこりと姿を現した。

双子揃って渋い顔を男に向ける。

「異世界とかいってただけだただの汚い部屋じゃない」

「あのマネキンは趣味を疑うな」

「違うよー？面白い空間が良いって言うからちよっと衣替え？しただけ」

「つまり貴方が面白いと思う空間がこの部屋、ってこと？更に趣味を疑うわねえ」

少女の目付きはもはや、変質者を見るそれである。

少年の方はまだ優しい目付きだった。小指の先程度だが。

「……ボク、こんなに否定されたの初めてなんだけど……」

「ああ奇遇。私だって変人に拉致されたのって初めてだわ」

少女の視線は冷えきっている。

男の方はというと、言葉の割にはどこか嬉しそうだ。

もしかしたら全ての苦痛を快楽に変換してしまう人種なのかもしれない、と少年は思った。いわゆる被虐趣味、マソヒストというやつだ。

このまま話を続けても特に進みそうにないと判断したらしい少年は、仕切り直すように声をあげる。

「で、あんたは何しに現れたんだ？」

少女にちくちく暴言を言われながらも楽しそう——もとい、嬉しそうな男は、今気づいた、と言った風に話し始めた。

「いきなり飛ばすんじゃ、流石に可愛いそうかと思って。オマケしに来たんだよねー」

「おまけ？」

「そ。オマケ内容は言わないけど」

首を傾げた少年に、男はぱちんとウィンクをきめた。間を入れることなく、少女が「気持ち悪いわねえ」と引いた顔をする。

今度こそ男がしょぼくれた。

女子高生はかくも残酷で正直な生き物なのだ。

「中身を教えないなら来る意味無いんじゃない？」

姉の言葉は尤もだと少年も頷く。

対して、男の方は悪戯っぽい笑みを浮かべ、立てた人差し指を左右に振って見せた。

「オマケしたよ、って言わなきゃキミ達、感謝しなさそうだからネー」

「それを聞いて感謝する気は起きなくなっただな」

「感謝って求めるものじゃないしねえ……」

そもそも拉致してきたところからして感謝も何もない、と双子は口を揃えた。

男は「可愛くないネー」と笑うとぱちんと指を鳴らす。

「もーちよつと話したかったけど、それじゃ連れてきた意味ないしネ。じゃ、行つておいで」

二人が言葉を発するよりも早く、視界が再び黒に覆われる。

二回目の暗闇に二人はもう一度目を瞑る。期待と興味こそあれど、不思議なほどに恐怖や不安がない。

隣にいるもう一人の自分とも言つべき存在を感じながら、二人は穏やかに意識を失った。

1 蝉時雨と双子（後書き）

誤字、脱字の連絡お待ちしております。読んでくださってありがとうございます。

2 黒衣の騎士と双子

「……今度は普通の部屋？」

「フアンタジーにありそうな部屋だよな」

どちらともなく目を覚ました二人は、自分達が倒れ込んでいた部屋の中をきよろきよろと見渡す。

硬かった地面は、何か柔らかなもの——絨毯に変わっていた。

燕脂色の絨毯は毛足が長く、二人の革靴をすっぽりと受け止めてしまうほどだ。

「今度は本当っぽいわねえ」

「ガチっぽいな」

夏休み中の全校登校日の帰りに異世界へ連れて行かれる、だなんて思ってもみない出来事。

沈み込む足元の感触、ひんやりした空気が現実感を持たせる。

広々とした部屋の中には、装飾の施された、落ち着いた色合いの一人がけの椅子が一つ、二人が倒れていた向こう側に見える。

その椅子は今立っているところより少し高い場所に置いてあり、椅子の向こうには薄紫色の、人の三倍はありそうな大きな水晶が煌めいている。

簡単に現すならばそれはまるで——

「RPGゲームの謁見の間、って感じね」

ひんやりした中にどこか歴史を感じるような匂いが混じっている

な、と少女は空気を吸い込んだ。

尤も、それを弟の悠斗に表現させれば「埃と黴のにおいを薄めた感じ」になるわけだが。

「ま、『誇り』と『華美』は感じるけどねえ」
「？」

薄暗くなかったら大層豪華なのであろう部屋を見て、ちょっとした言葉遊びに興じた凜音。

それに悠斗は首を傾げ、凜音はちよつと笑って手を振った。何でもない、と。

「とにかく出ましようか。何か扉もあるみたいだし」

それもそうだと二人して持っていた荷物を持ち直し（荷物も異世界送りにされたようだ）、二人は立ち上がる。

途端に、扉が勢い良く開いた。

うわ、と悠斗は声を上げる。

開いた扉から差し込む光が目には痛い。

「お前、どこから入った！」

開いた扉の前に立ち、男が声を張り上げる。

逆光のせいで顔や体付きは不鮮明だが、声からして男だ。

「ここは立ち入り禁止区域だ！」

知らねーよ、と悠斗は言いたい。意図的に入った訳じゃないのだ

から。

つかつかと部屋に入るなり睨みつけるその男に、悠斗は舌打ちを一つ。

腰のベルトに鞘が見える。

ここがファンタジーなら間違いなくこの男は近衛兵か騎士辺りだろう。

この部屋の豪華さからしてそれはある一定の真実味を悠斗に持たせた。

そしてそれが事実ならば、捕らえられて牢獄行き、最悪のパターンで処刑、といったところだろう。

それならば捕まるわけにはいかない。

肩にかけなおしたばかりの竹刀ケースから竹刀を取り出し、悠斗は構える。

真剣を携えた兵士に対して、竹刀でどこまで持つかが心配だが、自分は相手を倒す必要はない。

出来るだけ時間を取って隙を多く作れば良いのだ。

「やはり賊か？」

懐疑的な男の顔目掛けて竹刀を振り下ろす。

どこかでカチカチと音がした。

男に避けられる前に竹刀を引き、足払いを掛けるべく竹刀を斜めに膝に向かって振る。

風切り音の大きさが、悠斗の振りの大きさを表している。

男は飛んでそれをかわすと、悠斗を距離をあげ、腰の鞘に手をの

ばした。

「なかなか出来るようだが、大振りだな」

隙が多いと呟く男の後ろから、白くてほっそりした手が伸びる。その手の持ち主は男の首元に刃を出したカッターを突きつけると、ひっそりと囁いた。

「隙、ねえ？」

「もう一人いたのか」

男ににんまりと笑いかけたのは凜音だ。

彼女は耳が良い。

男が部屋に入ってくる前に薄暗い部屋の片隅に潜み、息を殺し、部屋に入ってくる者の不意を討とうとしていたのだ。

不意討ちは性別上不利に立たされてしまう凜音の得意分野でもあるし、確実に仕留めるには都合の良い方法だ。

悠斗もそれを理解していたから、わざと竹刀を取り出して構えた。相手の視線を、ひきつけるために。

さっきのカチカチという音は、凜音がカッターの刃を引き出した音。

悠斗の大振りな竹刀の振りは、風切り音によってその音をこまかすための行動だ。

何故凜音がカッターを都合よく持っていたかといえば。

手先が器用で工作を好む彼女は、制服のポケットにカッターを入

れて持ち歩く癖があった。

そのカッターは時として護身用の武器ともなる。

大企業の社長令嬢ともなると、誘拐犯から引く手数多だ。彼女が用心するのも無理はない。

彼女の不意打ちもそこから生まれた自衛策。

「武器、捨ててくれませんか？」

首元に銀色の刃を突きつけた凜音に、男は寧ろ不敵に笑った。

「そんな物で俺を退かせようとは恐れ入る」

首元に近づけられた刃など意にも介さず、男は自らの手を後ろに伸ばし、凜音の腕を掴んで捻り上げる。

「痛ったあつ」

「忍耐はあるみたいだな」

捻り上げてもお力ターを手放そうとはしなかった凜音をそう評し、男は腕を掴んでいる手に力を込めた。

ミシミシと嫌な音がするが、凜音は歯を食いしばって男の背に蹴りを入れる。

「凜音っ」

竹刀を放り投げ、確実に男の顔を狙って繰り出した悠斗の拳は、男の顔に当たる寸前でガラス質の壁のような物に遮られた。

「話は後でゆっくり聞かせて貰おう」

男がそう言った瞬間に、二人の体に黒い縄がまとわりついた。凜音と悠斗をそれぞれ片手で抱え、男は部屋を出ていく。なおも抵抗し続ける二人に舌打ちをした男は、何事かをはっきりと呟く。それを意識するか否かの瞬間に、二人の思考には靄がかかる。

何も考えられなくなつて大人しくなつた二人に冷たい視線を向けると、男は冷たい石廊に靴音を響かせ、この国の『王』とも呼ぶべき存在に、二人の処遇をどうするべきか問いに行った。

＊

「質問に答える。真面目にだ！」

「答えましたって」

「俺達の方が信じられないくらいだつつの」

董色の美しい眼を限界までつり上げ、黒衣の男は双子に辛抱強く答えを求めた。

対する双子は半ばうんざりとしながら、通算八回目の男の質問に答える。

「……どうやって入ったと聞いている」

「だーからあー！『帰宅途中に変人に声をかけられたらいつの間にかあの場にいた』の！」

凜音の説明も最初こそ丁寧だったが、八回目ともなると粗雑になつてくる。

そりゃあそうなるよな、と悠斗も疲れた顔をする。何をされたんだかは分からないが、自分の攻撃は確かに防がれた

し、ここにくるまでに行動はおろか思考の自由まで奪われた。

おかげでいまいち現状の確認が取れていない。

それなのにほばいきなりの状態で、ああいう応酬を交わせる姉が羨ましい。度胸は前からあったが、命の危機かもしれない状況でここまで吠えるとは。

「ああもう！埒があかないわ！」

うんざりした調子で凜音がため息をついた。長い睫に縁取られた目をきりりとつり上げる。

「話の分かる責任者を呼んでらっしゃい」

「……あのなあ、クレーム入れてる訳じゃないんだぞ」

危機感をどこかにおいてきたような、少しずれた言葉に悠斗の危機感も殺がれてしまう。

「そうは言ってもこの人、頭堅いんだもの。話の分からない人に話しても無駄でしょ？」

「そうだけどさ……」

「良い？『異世界から来ました』なんて普通言わないよな、って思われるのはしかたないと思うわ。でもねえ、『服装がおかしい』『持ち物に解読不可能な言語が混じっている』、の条件を提示された上でもそれを信じないのって、頭が堅いかバカのどっちかよ？」

確かに、二人が連れてこられてすぐに持ち物検査をされた。

夏休みの登校日にこっちに來ただけあって、荷物は限りなく少なかったのだが、それでも筆箱やプリントの束、ノートなどは入っているわけ。

文学少女を自称する凜音の鞆からは文庫本が三冊ほど。

中をペラペラとめくった男が、「どこの言語だ？」と聞いたのは事実だ。

その前にも、「見かけない服装だな」と男は二人を怪訝な顔で見ている。

「でも、常識的に考えたらあり得ないことではあるし」

「『常識ではありえないことがあったから』こうなっているんじゃないかって？ そうなった以上、常識の元に話を続けるのなんてナンセンスよ」

二人の言い争いに眉を顰め、男が制止をかける。

その顔には色濃く困惑と疲労が現れていて、双子も大人しく口を噤んだ。

「……お前達の話はまあ、何となくだが理解はした。信じられそうにないが」

「俺達だって信じられないって」

「理解したのが驚きだわ」

あっさりとそう言い放った凜音は、どこか拗ねているようにも見える。

何かあったのかと悠斗は考えて、すぐに思い至った。後ろ手に縛られた姉の左手首は、人の手形の形に赤黒く変色している。

嫌な音がしていたから、もしかすると骨にヒビ位は入ったのかもしれない。

手先を使うことに喜びを見いだす姉からしたら、拘束より酷い仕打ち、というものだろう。

「手え、酷い色してんな」
「嘘お」

凜音が不意に泣きそうな声を出す。

男が目に見えて慌てた顔をした。
必死に取り繕っているが、表情を読むのに長けている悠斗からすれば丸分かりだ。

どうやらこの男、女に弱いらしい。

とは言っても、いわゆる「色仕掛け」に弱いタイプではなく、女性に力を行使できないタイプ、という意味での「弱い」だ。

「凄く腫れてるってか、色がグロい」

「ええ……どうしよう、私手が使えなくなったら死ぬ。死ななくても自死する」

手が使えなくなったら生きている意味なんて見いだせない、と俯いて啜り泣きを始めた凜音に、悪かったと男が慌てる。

ぐずぐずと泣いたままの凜音にどう声をかけるべきなのかと戸惑っている男を後目に、悠斗は案外チヨロいもんだな、と冷めた目でそれを見ていた。

凜音の涙の95%はいわゆる「女の武器」だ。

悠斗の知る限りの凜音は、「左手がなくても右手で頑張る」の考え方で、「両腕なくしたら口使って頑張るわ」と言うタイプの人間だ。断言できる。

気づけば良いな、と言う程度で手の色を指摘したのだが、凜音はうまくそれを活用した。

涙声は思わず悠斗もビビる完成度。

おそらく、凜音も薄々「この男は女の涙に弱そう」と気付いていて、とっさに演技したのだろう。

（こんなんでよく騎士なんて務まるよな）

逆に心配してしまう。

悠斗の眼前では、凜音が完全に男を騙しきっていた。

女ってホント怖い。涙には騙されないようにしようと悠斗は誓う。

「お待たせしました」

部屋の扉が開いて、双子と同年代か少し上くらいの少女が入ってくる。

入ってきてすぐに、少女は困った顔をした。

「ヴェインさん、泣かせるのは良くないと思います」

涼やかで聞き取りやすい声だ。

薄氷色の眼を困ったように細め、少女は三人に近づく。

紺色のふんわりしたワンピースがふわりと揺れる。

こつこつと黒い編み上げのブーツを動かす度に、彼女の背中では豊かな髪が跳ねた。背中の中程までの長さのそれは一見黒く見えるが、光が当たると紺色に色を変える。

さらさらと髪の流れる音が聞こえるまでの距離になると、彼女がらふんわりとした花の香りが漂っているのに気がついた。

「『約束の間』にいた方達？」

「はい」

「どうやって入ったのかは？」

「……信じられない話かと」

「そうですか？うーん、とにかく、ちょっと呪文を解いて下さい」

柔らかに微笑んで、少女は凜音の手首を指した。

しかし、と言ってから、諦めたように頷いた男は、手を宙で横に薙ぐ。

あつと言う間に消え去った黒い縄を見て「助かります」と少女は微笑むと、凜音の左手首を優しく自らの手のひらに乗せる。

黒くさらりとした生地の手袋に包まれた手に凜音は探るような目を向ける。

「ごめんなさい。ヴェインさん、力が強くて仕事熱心なだけなの」

凜音の手が乗っていない方の手で、少女はくるくると円を描くように手首をなぞる。

青白い光がパラパラと舞って、凜音の手首は元通りの白さを取り戻した。

「凄い……」

思わず凜音が呟く。それに可愛らしくありがとう、とはにかんだ少女に、凜音も丁寧に礼を述べた。

「どうしてあの場にいたのか、教えて貰えますか？」

ちよつと申し分けなさそうな少女に、凜音が頷いて丁寧に話し始

める。

帰宅途中で黒ずくめにシルクハットの変な男にあったこと。

『異世界に招待する』と言われたこと。

暗闇に飲み込まれ、気がついたらあの場にいたこと。

子細取りこぼしのない説明は、男に最初していたものと同じだ。

顔をしかめて「真面目に答えるように」と告げた男と違い、少女の方は真剣な面持ちで二人を見つめた。

「何一つとして嘘でないです」

「本当ですか」

呟かれた言葉は男に向けられたものらしく、男はすぐに顔色を変えて二人を見ると、悠斗を縛っていた縄を消した。

「手荒な真似をした。申し訳ない」

「いや、あんたの仕事なんだろ」

仕方ない事だと悠斗も凜音も口にする。理解して信じてもらえばそれで良いのだから。

それより、その人の話を簡単に信じたことの方が私は気になるかな、と、凜音は男に目を向けた。

「この方は、嘘を見抜く能力があるんだ」

「そうなの？便利ねえ」

悠斗からしてみればびっくりするような言葉だったのに、凜音はそれが当たり前かのようにさりと納得してしまったらしい。また

は「そんな事あるわけじゃない」と疑っているから、適当に流しているのか。

「昨日の夕飯、カレーだったんだ」「ふーん」という会話くらいの軽さ。

もう少し衝撃を受けても良いんじゃないのか。

「凜音は「嘘を見抜く」とか簡単に納得出来るのか」

「え？だってほら、事態は私たちにとって良い方向に向いてる訳だし？ここで否定するのもなんか変じゃない？」

確かに、「嘘についていない」と言う主張は事実であると証明されている。それでも悠斗が少し気後れてしまうのは、やはり「頭が堅い」のか。

「常識……私たちの世界での『常識はここじゃ通用しなさそうだし。異世界に飛ばされた時点で『ああそういうもんなのね』って納得するものじゃないの？異世界に飛ばされることよりかは『嘘が見抜けます』の方がまだ信じやすいし」

「常識……常識なあ……凜音はあっちでも常識知らずだったのにそんなこと言うとはな」

「失礼ねえ、常識は身につけてたわよ？ただ、縛られるつもりがなかったっただけ」

それはそれでどうなんだ。

二人の会話に耳を傾けていた少女と男も、今や何とも言えない顔で二人を見比べている。

元通りの白さを取り戻した手首をしげしげと見つめて、「医者要

らずねえ」と呟く凛音は、完全に吹っ切れたようだった。
声に感心は混じっていても、畏怖や驚愕はない。

2 黒衣の騎士と双子（後書き）

誤字・脱字の報告、お待ちしております。読んでくださってありがとうございます。

3 少女と双子

「とりあえず、場所を移動しましょう」

床に座ったままの状態では体も冷えますから、と少女が凜音の手をとる。

ありがとう、と立ち上がった凜音に、少女は少し驚いたような視線を向ける。

「背が高いんですね」

「まあ、女って言うカテゴリの中だと大きいかしら」

「羨ましい」

尊敬というか羨望の眼差しで少女は凜音を見つめている。

「私は背が小さいほうが女の子っぽくて好きなのよねえ」

「でも、背が高いほうが絶対カッコイイですよ」

少女の背は、凜音と頭一つは違う。騎士のほうと比べれば、少女は騎士の鎖骨くらいまでの背しかなかった。

その傍ら、悠斗は男に腕を引かれて立ち上がっていた。すまなかった、と再度の謝罪に悠斗は手を振る。

「仕事なら仕方ない。別に怪我させられたわけじゃないし」

「しかし、君の連れに……その、取り返しのつかないことをしてしまった」

ああ、と悠斗は考える。

この黒衣の男性は思ったより真面目で、責任を感じるタイプらしい。

手が動かなくなったら云々の凜音の嘘を信じきっている。

侵入者には容赦無いだけで、普段はもの凄く良い人なんだろうと悠斗は思った。

「あー、言いにくいんだけど、あれはほら、ただの演技なんだ」
「何だと！」

男の顔が驚きに染まっている。

部屋を出ていこうとしていた女性二人も振り返った。

「俺達が言う事じゃないけど、なんて言うか、女の涙には気をつけるべき」

「……分かってはいるんだが」

どうも苦手なのだと、先ほどより少し表情を穏やかにして男は言葉を返した。

「泣かれるとどうしていいか分からない」

「あー、まあ」

悠斗だってその気持ちはよく理解できた。

今でこそ確信を持って嘘だと判別できるが、それでも凜音が泣くと心配というか、どうして良いのか分からなくなる。嘘泣きというのは恐ろしい。

「ヴェインさん、行きますよー？」

「悠斗も」

ほらほらと手招く女性陣に今行く、と返して男も悠斗も部屋から出た。

出たところで驚く。

「長い廊下だな」

「長いのはここだけだ」

気持ちよく走っても終わりが見えなさそうな長い廊下は、全て白い石で作られている。

そのせいで窓から入り込む光を照り返し合って、まるで光っているようだった。

眩しい、と呟けば、すぐに馴れる、と簡潔な答え。黒衣の騎士だ。

「これから、少し歩きます」

「ここってお城なの？」

歩くことには特に興味を示さない凜音が、隣にいた少女に問いかける。

廊下が余りに広いし、他に通る人もいないからと四人は横並びで歩いていた。

真ん中に女性二人、脇を悠斗と男で固める感じた。凜音の隣には悠斗、少女の隣には男。

「いえ。塔ですよ。『約束の塔』と呼ばれています」

どうせですから、少し話でもしながら歩きましょうか。

柔らかな笑みを浮かべて、少女はゆったりと石廊を歩く。こつこつと四人分の足音が反響しては光に吸い込まれていった。

少女の横顔は光に照らされてぼんやりとしていたが、神秘的で美しい。

銀色の靄のようなものが見えた気がして、悠斗は思わず目をこする。

少女は長い歴史の流れを感じさせる声で、紡ぐ。

この国は千年ほど前に出来た国らしい。しかし、世界規模で見るとまだ若い国なのだそうだ。

この国を創った者は、ある一つの願いを込めてこの国に名をつけた。

「――<エリユシオン>。この世に生けるもの全ての理想郷であつてほしい、と彼女はこの名に、約束をした。それ故、この国は<約束の国>とも呼ばれている」

いつの間にか、話し手が少女から騎士に変わっていた。

楽園の名にかけてこの国を楽園、理想郷にすると、建国者は誓ったのだという。

その建国者は膨大な魔力で国を発展させていった。人も、魔女も、悪魔も、半魔も、全てが苦しむことのない世界を創ることを目指して。

「悪魔？」

凜音の呟きを拾った騎士が、ああ、と納得したような声を上げた。

「そうか、君たちの世界に私達のような存在はいないのか」
——『私達』？」

今度は悠斗だ。

少女が軽やかに笑っている。 騎士の方も、どこか楽しそうな声で、「ああ」と悠斗に返した。

「申し遅れたな。私はヴェイン・クラリック」

——こちらでいう、『悪魔』だ。

今度は凜音も驚いた。

騎士——ヴェインの顔をしげしげと見つめている。

「私程度に驚いていたら心臓が持たないぞ？」

ヴェインはそう言うと、ニヤリと笑って隣にいた少女に視線を送る。

少女ははにかみながら、それでも誇らしげにこう伝えた。

その時の衝撃は多分、一生味わえないのかもしれないと、双子は後に語る。

「リリー・ナトウィックと申します。悪魔ではなく魔女ですが——この国を、創りました」

目を見開いたのは仕方がないだろう。

この国が出来たのは千年前で、でも目の前のリリーは双子と対し

て変わらない見た目で、魔女で、膨大な魔力で国を発展させた――

「「建国者!?!」」

双子は顔を見合わせてしまう。

こんなことをいうのは失礼かもしれないが、彼女に親しみは感じても、威厳や威圧感はない。

建国者なんて、嘘だろうと思う。

「あらー。どうしましょ、さっきから無礼な態度取りまくりだわ」

知った今でもその態度なら、その言葉に意味や意志なんてないんじゃないかと悠斗は思った。

或いは呆然としているだけなのか。

しかし、彼の姉は本当に驚いても次の瞬間には「あら、そうなので終わらせてしまうことが出来るほど適応力が高い。

つまり、本当に無礼と思っているかどうかは、彼女にしか分からない。

「無礼を働いたのはこちらです。まさか、異世界の方とは知らず」
「いいえ。本当に無礼なのは私達を飛ばしたあのイカれた帽子です」
マッドハッター

一応、目上の者だと判断はしたらしい。

悠斗は胸をなでおろした。折角解放されても、不敬罪でまた捕まるなんてごめんだ。

「……私、貴女の言葉遣いが面白くて好きなんですけど」

「敬語抜きでつてこと？」

早速敬語を使った凜音に、リリーがちょっと寂しそうな顔をした。あつさりと碎けた調子に戻れば、リリーはほにやっと笑って頷く。

「貴女からすれば、私はただの異世界人でしょうし」

「うーん、正直なところ『親切な異世界の人』って感じよねえ」

正直すぎる言葉に悠斗は一瞬肝を冷やしたが、リリーは笑っただけだった。

「話戻しちゃうけど、そっちのヴェインさんは悪魔なんですよ？」

「ああ」

「悪魔って、私達の世界だと良くない印象があるの。こっちの世界だとどうなるの？」

『悪い』を『良くない』に変えたことくらいしか気を使っていない問いだが、ヴェインの気をとがめはしなかったらしい。

彼はそうだな、と一拍置いてから話し始める。

「はつきり言つて悪だ」

そうでなければ“悪”魔等とは呼ばれないだろうとヴェインは言葉切る。

凜音や悠斗のどうとも変わらない表情に興味深い目を向けてから、しかしだな、と彼は言葉を続けた。

「何にでも例外はある。私達はそもそも、“生まれながらに魔を使える種族”だった。それなのに悪魔と呼ばれるようになったのは、

私達の種族が魔を持たぬ人間を蔑視し、人を人扱いしなくなったからだ」

「差別してるってこと？」

「そうだ。魔を持たぬものは虫けら同然と言っていた奴もいる。…しかし、私はそうは思わない。彼らには魔はなくとも器用さや技能がある。そうでなくとも元は同じ生命だ。彼らは我らの良き友人であり、その命が軽いことなどあつてはならない」

幸いなことに悪魔の中でもそういう考えを持つものは少数ながらいるのだという。

「ここは、魔を持つ者も持たぬ者も、助け合って暮らしていこうと誓った国だ」

「凄いところね」

凜音が素直に感心の言葉を紡ぐ。

悠斗も気になったことを聞いてみた。

「じゃあ、悪魔と魔女は何が違うんだ？」

「魔女は後天的に魔を使えるようになった、人のこと。……ただ、悪魔より人を嫌う傾向が強いので、あまりこの国にはいないのです」

3 少女と双子（後書き）

誤字脱字の報告お待ちしています。読んでくださってありがとうございます。
ございました。

4 魔力と双子

残念な話なのですが、とりりーは寂しそうな顔をした。

これ以上は深く聞けないのだろうと凜音も悠斗も何となく察する。魔女になるにはそれ相応の何かを犠牲にする必要があるのかもしれない。

ヴェインが魔女の話に一切触れなかったのがその予感の正しさを裏付けていた。

「じゃあ、私たちは魔法は使えないのねえ。人だから」

話題転換をはかったらしい凜音が、ちょっと楽しみにしてたのに、とため息をつく。

それが残念そうなのは演技ではなく、本心からのものだ。しかし、凜音の言葉はヴェインやリリーに否定されることとなる。

「確かに、お二人とも人のようですね……」

「魔の才はあるはずだ。魔力が感じ取れる」

「感じ取るって、そんなことが？」

出来るのか、との悠斗の問いに、騎士は無論だと頷いた。
曰く、悪魔として生まれると他の者の魔力が可視できるそうだ。

魔力は色付きの靄のようなものとして、魔力持ちの者を包んでいくらしい。

色は何か意味が、と聞いた悠斗に、そうでなければ色など付かないだろうとヴェインは言った。

「色は大きく分けて、赤、青、黄色、白、黒。赤は炎を、青は水を、黄色は風の力を、白は回復と力の増幅、黒は闇と創造の力を表している。例外として「時」というものもあるが」

五色あるとは言っても、大抵は黄緑や桃、茶など混じった色ばかりで、原色は滅多にないらしい。

靄の色は、操ることの出来る魔力を表しているのだとヴェインは言う。

「一言で言えば絵の具だ」

黄緑は黄色に少量の青を加えて出来る色だ。その色の靄を持つ者は「風の力と少量の水の力」を使えると言うことで、桃は赤と白の混合だからこれは「炎と回復の力」を使えると言うことだ。

「だが、三色以上混ぜると判別はしにくい。闇が混ざった場合もな」

茶色の場合、「赤に少量の黒」を足す場合、つまり「炎に少しの闇の力」を使える者と、「赤に緑（黄＋青）」を足す場合、要するに「炎と風と水」を使える者の二通りが存在する。

特に、色などは混ぜるものによってがらりと変わってしまうから、判別しにくいと言うのは頷けた。

少量の黄色に黒を足しても、黄色は飲み込まれて黒のままだろう。つまり、二つの力を持っていたとしても表面上は黒の一色、闇しか持っていないと言うことになる。

「……そう言われると、確かに、リリーの周りにぼんやり色が付いてた」

先ほど見えた銀色のものは、見間違えや目のかすみではなかったようだ。

悠斗の言葉に、リリーがびっくりした目を向けた。

「私の色、見えるんですか」

「何か白っぽい？銀色みたいな……」

目を細めているから、相当怖い顔になっているだろう。

「ヴェインさんの色は？」

目をこらす。年上にガンをつけているような気分だ。

「いや、何も？」

「うーん……何か青黒い？あ、違うわ、これ黒に緑足した感じ」

一方で、凜音も同じようにヴェインを見つめていた。
こちらは睨むと言うより見通す、に近い。

「正解だ。私の色は見分けが付きにくいことで有名なんだが」
「絵を趣味にしたのよねえ。おかげで色の見分けはばっちり」
「リリーの方は、分かるか」
「分かんないわ。何にも見えない」

ヴェインの言葉に凜音は肩をすくめて見せる。

お手上げ、の意志をくみ取ったリリーは、悠斗に対して笑いかける。

「お二人とも、本当に素晴らしいですね！……ユウトさん、でしたよね？」

悠斗は頷く。

「私の魔力は“時”なのです。其れに“回復”を少し」

「……凄いのは凜音の方じゃ？」

俺にはあの人の靄は分からなかった、といえば、そんなことはないとリリーは力説した。

曰く、時の魔力は通常は可視化出来ないのだそうだ。全ての人に本当に少しずつ宿るものだそうだが、それを判別できる者は少ないらしい。

「時の魔力はとても強力で……通常は、時間とともに別の魔力に変換されるんです」

「変換途中の魔力ってことか」

「はい。時の魔力は時の魔力のままで持っている人にしか分かりません。そして、多くの者はこの世に生まれるまでに時の魔力を変換してしまいます」

一般的には胎児の状態で所持している魔力なのだそうだ。

「私は悪魔でないので、貴方にはほんやりとした魔の力しか感じられなかったのですが、時だとは」

「そんな力があるのか……時ってことは、時間を操れるとか？」

「いいえ。——私のように嘘を見抜いたり、通常見えないものを見る力を与えられます」

「じゃあ何で“時”？」

「それは、時を可視化出来るから。詳しい話は、中でしましょうか」

悠斗の問いにリリーはそう返して、廊下の突き当たりにあった扉を押す。

なかなか開かない扉に、ヴェインが苦笑いしながら手伝え、あつという間にそれは開いた。

「どうぞ」

リリーが続いて中に入る。ヴェインが最後に扉を閉めれば、その音に反応したのか、大きな声が聞こえた。

「お帰りーっ！」

「うわっ」

狼と少年が悠斗の隣をすり抜けて、ヴェインに全身でタックルを
かます。

ヴェインは体制を崩すことなくそれを受け止め、客人を連れてき
た、とだけ言った。

「お客さん？」

少年が悠斗と凜音に目を向ける。
鮮やかな翡翠の目が見開かれた。

「うつそー！人なのに人じゃない！」

「何それ」

「『どう見ても人なのに魔力持ってるー、すっげー』ってことだな。
ようこそ、お客さん？」

緑色の髪に翡翠の目を持った少年の後ろから、茶に近い赤毛に蜜柑色の目を持った、どこか野生味溢れる男性がひょっこりと姿を表した。

深い深紅の布が、白い革のズボンを覆うようにして巻かれている。まるでスリットの入ったロングスカートだと凜音は思った。ただし、布の裾の方は所々焼け焦げている。

茶色のジャケットにも時折焦げた跡。凜音が意識を集中させれば、男性の纏う靄が見えてくる。すがすがしいほどの、橙。赤と黄色の入り交じったそれ。

一方、凜音が思わずつつこんでしまった言葉を発した少年は、纏う靄まで深緑。

少し黒が混じっているのかもしれない。

少年の格好は、ゲームで言うならアサシンとか、シーフといったような見た目だ。

暗い緑のタンクトップに木の葉色のスカーフ。茶色っぽいズボンに、ウエストポーチ。森にとけ込めそうな格好だ。

「何か複雑な色だね。そっちのお姉さん」

相手も凜音と同じことをしていたらしい。
少年は凜音と悠斗を交互に見つめている。

「複雑？」

悠斗の不思議そうな顔に、少年がこくと頷く。
翡翠の目が興味と探求できらきらと輝いている。

それを、ヴェインが引き離れた。凜音と少年の顔はくつつきそうな程近かったからだ。

凜音は苦笑いで流したけれど。

「その話も後でだ。フィリアとミリアは？」

「フィリアもミリアもいるよ」

「分かった」

頷いたヴェインに、蜜柑色の目の男性が「『約束の間』はどうなつたんだ？」と至って軽い調子でのんびりと聞いた。

「侵入ではないから安心しろ」

「ってことは解決した？」

いや、とヴェインは首を振り、立っていた凜音と悠斗を前に押し出す。

不躰な男性の視線にさらされながら、双子は揃ってヴェインの方を向く。

「この二人が、別世界から飛ばされてきた。あの『約束の間』に「ふーん？何か面白そうだな」

「クラド、面白そうなんて言うべきじゃないんじゃない？こっちの二人は飛ばされて来ちゃったんだよ？不安かもしれないのに、ほんっとデリカシーないよねー」

少年が頭の後ろで腕を組んではあーあ、と盛大なため息をつく。

何だろうこの人たちは、と双子はアイコンタクトを交わしあった。中学生くらいの少年が、ボロクソに大人を貶している。

どっかであつたなこんなこと——思い出しそうになってから、悠斗は思考を中断させた。

この状況の元凶のことなど、思い出すべきじゃないだろう。

悠斗が頭の中の黒いシルクハットを抹殺している間に、少年と青年は口喧嘩をしていた。

「デリカシーくらいあるっつもの！」

「うっそだー。この前だってフィリアに「太った？」って聞いてピントされてた癖に！」

「アレはほら……アレだろ！」

「アレじゃ分かんたろう。客人の前でみっともないな、お前は」

「んだよ、ヴェインまでルシイの味方か。お前がそんな性格だからほらみる、ルシイまで捻くれた性格になっちまったじゃねーか」

賑やかなえ、と凜音が呟く。

友人がいなかった二人にしてみれば、この光景はある意味羨ましかった。

口喧嘩が収束する気配はなく、リリーがちょっと困った顔をする。大人しく座っていた狼が、ヴェインの足元に擦り寄った。

「クラド、お前より大事な話を忘れていた」

表情を変えなかったヴェインにクラドと呼ばれた男性はむくれたが、はいはいと適当な返事をして会話を打ち切った。

ルシイと呼ばれた緑の少年はどこか得意気にクラドをみている。きつと、ざまあみる、辺りだろうと双子は見当をつけた。

「人払いを頼む」

「へいへい。仰せのままにっ」と

じゃあちよっくら行ってくるわと軽く手を振って、クラブは部屋を出ていく。

「あの人は何しに？」

「……これから君たち二人には重要なことを話す。これは、広めるべき知識じゃない」

「そう」

「分かった」

質問に答えなかったヴェインに凜音がつつこまないのが気になりはしたが、凜音も悠斗もすんなり頷いて、案内されるままに部屋の奥へと入っていく。

部屋に入って抱いた感想といえば、「職員室っぽいなあ」だ。

内装は確かに控えめな豪華さがあるものの、部屋においてあるものといえは大きな執務机が六つ。

机の上には書類が山積みで、入り口から机を隠すようにして本棚が沢山。

本棚の迷路を抜けたところに職員室を彷彿とさせる空間があると言えは良いのだろうか。

そんな空間の中に革張りの一人がけソファが二つ。

どこことなく部屋に浮いた感じが、自分たちそっくりだと二人は思った。

それに座れといわれ、二人は腰掛ける。

見た目よりも柔らかなソファは、二人をすっぽり包み込む。

「あら。来客？」

もう二人増えた。

一人は薄い海の色 of 緩く巻かれた長い髪を持つ女性、もう一人はうさぎのぬいぐるみを抱えた、金髪の小さな女の子だった。

「あらあら？……なるほどね、もう少しお茶を入れてくるわ」

持っていた六人分のティーカップを一番近くにあった机に置いて、女性は本棚の海に姿を消した。

もしかしたら、あの本棚の間辺りに給湯室があったのかもしれない。

ぼんやりした二人の前で、女の子がそのティーカップを二人に持

ってくる。

「飲んで」

簡潔な一言に例を述べ、二人はカップを受け取った。
女の子はそれきり黙って、ルシイの傍に行ってしまう。

「まず、君達の異質さについて話しておきたい」

ヴェインの声は淡々としていて、表情は全く動かない。
先ほどまではあった親しみが、どこかに飛んだようだった。

「まず、君だ」

ヴェインは悠斗を真っ直ぐ見ている。

「さっきの話だ。時の魔力は、時として世界を滅ぼすこともある。
リリーの言うように、通常なら見えないものを見ることも可能だが、
力の制御が難しい。下手したら、君はその魔力によって死ぬ」

いきなり脳味噌を打ち抜かれた気分だった。
何だよそれと言いたくなかったが、どうも口が動かない。

簡単に説明するなら、体の中に死神飼ってるようなもんだろ。

背中に氷を押しつけられた気すらした。

「見返りは大きいかな。予言と言われる行為も可能になる。力の大きさによっては『運命』すら『書き換える』ことが出来るそうだし」

表情だけは平然を保つことで、心の方の安定をはかる。死刑宣告された気分だ。

紅茶の筈の飲み物が、何の味もしないと悠斗は思う。

ヴェインはそんな悠斗を一目見ると、今度は凜音を真っ直ぐに見た。

凜音が挑発するように視線を合わせる。

「君の方は、闇と回復の力が強すぎる」

「そう？」

「その上、一瞬一瞬で纏う色が違う。先ほどまでは赤もあったが、今は青しか見られない」

ルシイがヴェインの隣で頷いていた。

自分で気づかなかったかと聞いた彼に、凜音は自分の色は見えないと返した。

彼はしばらく思案顔になると、二人を真っ直ぐに射抜く。

董色の目は険しい。

これは何を言われても断れそうにないな、と二人は思う。

「単刀直入に言う。魔力の制御が出来るまで、君達はここにいて貰う」

「申し訳ありませんが、今の状態で貴方達を外に出すわけには参りません。貴方達も、周りの人も危険にさらされてしまう」

だめ押しのようなリリーの言葉。二人はゆっくりと彼女に視線を合わせた。

「見る人が見れば、貴方達が異質であり、強大な魔力の塊だというのは明らか。利用されない保証はないし、その魔力を暴れさせられなくても困るのです」

4 魔力と双子（後書き）

誤字・脱字の報告、お待ちしております。読んでくださってありがとうございます。

5 六人と双子

先ほどまでにはなかった威厳が、今の少女には宿っている。

いっそ冷酷ともいえるような色をその薄氷の眼に一瞬宿し、彼女は二人を見つめる。

品定めをされているようだと凜音は思った。

隣の悠斗の顔色が良くないのも気にかかる。

——尤も、あんな話を聞いて顔色を変えない人間なんて、ごく少数しかいないのだろうが。

「閉じこめるわけではありません。……ただ、しばらくこの国で暮らして欲しいのです。魔力を制御できるようになるか、元の世界に帰るまで」

リリーの声は穏やかだった。

一拍前の表情が嘘のように消えている。少女らしい柔らかさと、まるで聖母のような優しさのある顔。

「……その要請を受諾しないと言ったら？」

凜音の顔はいつも通りだ。震えていた悠斗の手に、自分の手を重ねる。

悠斗はほんの少しだけ安心した。凜音の手はいつものように、ほんのちよっぴり冷たい。

「それは賢明な選択とは言えませんが、私には貴女方がどのような選択をするのか、視えています」

「そう。分かった。この国にいるわ」

返事とともに紅茶を一口飲んで、凜音はゆったり笑う。

「弟が死ぬのもイヤだしね」

凜音は、悠斗の手をぎゅっと握る。

それには特別な意味はない。

ただ、そこに彼がいるのか否かを、確かめるだけの行動。

「寧ろ感謝すべきよねえ。これから、どうぞよろしく」

かちやり、と陶器と陶器のぶつかる音がする。悠斗はすばやく音のした方向を見た。凜音のほうは興味がないのか、それとも誰が来るのか分かっていたのか――驚くようなことはなかった。

「あらあら？意外と早く片付いちゃったみたいね」

紅茶のカップを二人分持ってきた女性が、おっとりとした笑った。

透き通るような青のマーメイドスカートの裾が、窓からの光を受けてぼんやりと光っている。

凜音は意識を集中させて、女性の色を読みとる。

能力に馴れるには練習が必要だろうと彼女は断定していた。

徐々に女性の周りに靄のようなものが見え始め、ゆっくりと色付いていく。

青と白。割合としては青の方が多いのだろう、青く色付いた硝子

を思わせるような、そんな色だ。

「クラドを呼び戻すべきかしら？」

おっとりとした声は緩く、滑らかに部屋を滑る。

それにヴェインが頷いて、女性は口元に何かを当てた。銀色に鈍く光る、クレヨンくらいの大きさのそれは。

ピーイ。

——ホイッスル。

笛一つで呼び戻されるものなのか、というよりどこかに行ってしまったクラドと呼ばれる男性にそれが聞こえるのかも気になるところだが。

「終わったなー？」

部屋の扉が、盛大に開いた音がした。

「取ってこい」の犬か、と悠斗は思ってしまう。

少しは心に余裕が出来たのを感じ、彼は双子の姉を見てみた。

「結局あの男の人は何しに行ったの？さっきは教えて貰えなかったけど」

姉は憎らしいほどいつも通りだ。

凜音の問いに、ヴェインが気のない返事をする。

「君たちが逃げ出した場合の保険だ。彼女も、彼も」

「なるほど？来る途中の給湯室と、扉を出たすぐの所で——いつでも捕まえられるように二つ保険をかけたってことね」

凜音は納得したらしい。あっさりとそれ以上の追求をやめた。赤い男性が再び姿を表したところで、リリーが声をあげた。

「しばらく滞在して頂く方達ですし、自己紹介をお願いします」

私とヴェインさんは済ませています、と前置いて、リリーはすぐ隣にいた少年に目を移す。

少年はにっこり笑った。

「ルシイ・ティギイ！ルシイって呼んでね！」

これからよろしくね、と元気一杯な挨拶に、双子の方も表情が緩む。

それから、ルシイはすぐに、自分の後ろに隠れてしまった女の子を前に押し出した。

「……ミリア」

それだけ言うと、ささっとミリアはリリーの後ろに隠れてしまった。

金髪にルビーのような瞳が可愛い、と凜音は頬を緩ませる。アンティークドールのような衣装も、彼女にぴったりだった。

ミリアの紹介に苦笑いしたルシイが、ごめんねー、と言いながら言葉を補足する。

「ミリアはちょっと恥ずかしがり屋だから……でも、良い子だから

ね！」

「ええ、もちろん。さっきは紅茶をありがとう」

にっこりとした笑みで凜音がミリアに手を振る。

そっぴいば子供好きだっけ、と悠斗は凜音を見つめる。

悠斗自身は子供が嫌いではないのだが、悠斗の切れ長の目を怖がつて、子供はあまり近寄つてきてくれない。

「次は私ね」

全体的に青く、海を思わせる女性が、ゆつたりと前に出た。

「フィリア・スカイテナート。フィリアと呼んで頂戴ね」

何か困ったことがあったらとりあえず聞いてみて、とゆつたり笑つて、フィリアはクラドの腕を引いた。

ほら行つてらっしゃいなと前に押し出され、彼はたたらを踏みつつも前に出る。

「クラド・デュルグ。なんて呼ぼうが構わねえ」

適当に呼んでくれや、と彼は笑つて、次はお前らなと二人に笑いかけた。

どっちから紹介する？と二人して目を合わせ、凜音が小さく頷く。私が行くね、と。

「高月凜音。凜音と呼んで下さい」

ソファから立ち上がつて凜音が頭を下げる。ルシィがすかさず手

をあげた。

「タカツキリンネってどこで句切るの？あと、リンネは名前？名字？愛称？」

「高月・凜音。高月で句切るの。凜音は名前、高月が氏。多分皆さんとは名前の並びが逆かなって」

「分かった。リンネだね」

ふむふむと馴れるように繰り返される名前に、凜音がくすぐったそうな顔をする。

期待の視線を一身に背負って、悠斗もソファから立ち上がる。

「高月・悠斗です。悠斗と呼んで下さい」

「ユウト？」

ルシイの言葉にそうだと頷く。

「あれ？ユウトもリンネも名字一緒？」

「双子だからな」

悠斗の言葉に周りがぼかんとした顔をする。何か変なことでも言ったのだろうか、と悠斗は心配になった。

凜音だけが小さく吹き出していた。肩が震えている。

「何それ！つまんない！」

「え？」

「恋人同士かと思ったのに！双子！」

今度は悠斗がぼかんとした。

それってつまり、ここにいた自分たち以外の皆はそう認識してい

たつてことで、

「……だから『連れ』か!」

「気付くのおっそいわねえ、悠斗!」

ヴェインに『連れ』と言われて少し気になってはいたのだ。

何だか照れくさそうな発音の仕方だし、遠慮めいた所があったから。それはてつきり凜音に対しての罪悪感かと思っていたのだが、そういうことか。

凜音はけらけら笑っている。

「……すまん、勘違いしていた」

ヴェインが耳を少し赤くしてて謝罪を述べる。

「あんとと私、似てないしねえ」

「いや、気付いてたらさりげなく訂正しろよ!」

「ま、ちよつと驚かせても良いかしらって」

「良くねえよ!」

大体、何故勘違いしたんだ。

「どっかの騎士っぽい男に対して不意打ちを狙う女と、殴りかかる男のどこが恋人に見えるんだよ!」

最悪のカップルじゃないかと思う。通り魔的というか、まず関わりたくない。

百歩譲っても——いや、譲れない。ありえない。

「いや、揃いの服を着ていたからな」

「これは制服だよ！ある一定のコミュニティに所属する時にお互いに仲間意識を持たせるために使うようなものなんだよ！」

ペアルックかよ古いだろ！と怒涛の勢いで突っ込んだ悠斗に、ヴェインはぼかんとした顔をした――とは言っても、目をほんの少し開いただけだったが。

「めずらしーね！」

にこにこと笑うルシィに、でしょー、と凜音も笑う。

「服装程度で仲間意識なんて持てる訳ないじゃん！馬鹿みたい！」

笑顔で放たれたルシィの言葉に、私もそう思うわぁ、と凜音が笑っている。

ヴェインがルシィの頭をはたいた。

「少しは内容を吟味しろ。失礼に当たるだろう。それだと先程のクラドと同じだ」

「げっ」

心底嫌そうな少年に、クラドが長い腕を絡めて問う。

「何でんな声出してんだア？」

ヤクザに絡まれる少年のようだったが、この場合は少年の保護者が強かった。

「お前は本当に大人げないな。少しは成長しろ」

ガキと変わらないぞとため息を付き、黙らせる。

「客人もいるんだ、見苦しいだろう。――まずは二人の滞在場所を決める」

それに同意を返すかのように、部屋の入り口付近で座っていた狼が吠えた。

ここにも保険かけてあるじゃないの、と凜音はさらりと狼を撫でる。

狼を何の躊躇いもなく撫でた凜音にも驚いたが、驚いたのは悠斗だけではなかったらしい。

撫でられた狼が、小さく鳴いて体を丸めている。

「怖がられた」

「こいつにはリンネ、君の魔力が見えている。暫くしないと馴れて貰えないと思う」

ヴェインの言葉にそうなの……と、凜音がしょんぼりした。

狼に怖がられてしょんぼりする女子高生が身近に居ることに、悠斗は一抹の不安を覚えた。狼に怖がられる女子高生なんて、出来ることならお目にかかりたくはない。

――野性の本能でも凜音は危険物扱いか。

思わず苦笑いしてしまう。

「ヴェインさんがこの子の飼い主？」

「そんなところだな。私よりミリアに懐いているようだ」

手に擦り寄る狼を一撫でしてから、ヴェインは部屋の扉を開けた。フィリアとクラド、ルシイは部屋に残り、行つてらっしゃいと手を振って二人を見送っている。

「……この子は貴方に忠誠を誓っている。わたしに対する愛情とは別のもの」

部屋を出た所で狼の背に乗ったミリアが、ヴェインの言葉にゆっくりと返す。

やはりそれきり黙ってしまうと、凜音とヴェインの間、狼の歩くペースで揺れながらたまに交わされる話を、ミリアは興味深そうに聞いている。

「俺達のいた『約束の間』って何で立ち入りを禁止されているんですか」

前を歩くリリーとは十歩の距離を保って、悠斗は隣にいた騎士に説明を求めた。

二人が目覚めた場所があそこでなかったら、多分こんな事態にはなっていない。

「……『約束の間』は、この国の存在に根本から関わっている」

まだ知らないだろうが、とヴェインは本を朗読するような調子で、この国の立地について話し始めた。

この国は一つの大きな湖の上にあること。

国全体は大きな浮島の上に成り立つものであること。

その浮島は国を支えられるような強度はないこと。

その浮島を沈まぬようにしているのが魔力だということ。

その魔力の源はリリーであり、その力の増幅させるのがあの薄紫の水晶で、年に一度ある『魔力増幅の儀式』が行われるのがあの『約束の間』だということ。

「凄いところに入っちゃったな」

「あの部屋には、普段は限られた者しか出入りできない結界が張つてある。さっき部屋に残った三人と、リリー、ミリア、私の六人だ」
「ああ、だからあれだけ真剣に入った方法を聞いたのねえ」

凜音が独り言のように呟く。水晶削ってこなくてよかった、と聞こえたのは気のせいだと思いたい。——観光地とは訳が違う。

「そうだ」

「帰る方法についても検討しないとだめですね」

出来るだけ早くに帰れるよう協力は惜しみません、と言ったりリリーに、双子は声を揃えて「もう少しこの世界にいたい」と言った。
何故、と静かな声で問うヴェインに、二人とも曖昧な言葉を返す。

「何故、か。分かんないかもしれないけど、俺達の居た世界って、俺達に馴染んでない気がしてたんです」

「才有る身に生んでくれた両親に感謝はしていても、その両親もあんまり構ってくれなかったしねえ……」

この世界は面白そうだと双子は思っていた。

退屈も平凡さもない世界。

自分達のやり方、力が通用しない世界。

自分達を区別することなく、同一視する世界。

自分達の本質を、価値を、力を一から試せる世界。

「急にこっちに飛ばされて、確かに戸惑ったけど……同時に、どこか救われた気もしました」

悠斗の言葉に、ヴェインは頷いただけだ。

「巧く話せませんが、俺はこれを“チャンス”だと思ってます」「さっき見た顔が嘘のようだな。良い顔をしている」

死刑宣告されたような顔だったものねえ、と凜音がくすくす笑った。

うるさい、とぶっきらぼうに返せば、凜音が笑ってごめん、と言う。

それを優しい眼差しで見つめているヴェインはどこか遠くの何かを二人に重ねるようだ。

不意に彼は視線をそらし、何事もなかったかのように前を向く。

「はい、じゃあ下におりましょう」

一時拘束されていた部屋の前を通り過ぎ、50歩ほど歩いたところで、行き止まりに案内された。

階段もなしにどうやって降りるのかとヴェインに問えば、彼は人の悪い笑みをニヤリと浮かべる。

「見ていれば分かる」

行き止まりの前で、リリーが祈るような仕草をしている。

何かとのぞき込んでみれば、床に何かが描かれているのが分かった。

淡青の光をほろほろとこぼしながら息づくように光るそれは、魔法陣。

淡く光るそれに足を乗せたリリーが、双子に手招きする。

おそろおそろそれに乗り、ヴェインと狼に乗ったミリアもそれに続けば、リリーがブーツの踵を打ち鳴らす。

あっと言う間に魔法陣から溢れた光が、四人を包み込んだ。

ジェットコースターと言うよりはフリーフォールだろうか。

一瞬持ち上げられたような感覚の後に、急降下するような感覚が襲ってくる。

まるで、夢の中で高いところから足を滑らせて落ち続けているようだ。

包まれていた光が淡く四散すれば、そこは外に続く入り口の目前だった。

「本当に塔ねえ」

上を見上げる凜音に倣って、悠斗も見上げる。

白く、大きな塔が目の前にそびえていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2297ba/>

a Wandering Life

2012年1月9日20時47分発行